

出エジプト記 32 章 1～14 節「契約に基づく祈り」

礼拝を通して私たちは、主への信頼を表し、主の恵みを証ししています。また、みことばによって主を知り、主への信頼をさらに深めさせていただけます。

幕屋に関する主のことばが終わりました。モーセがシナイ山に登っていた期間は四十日四十夜でした。その期間はシナイ山のふもとにいたイスラエルの民にとっては試みの時となりました。

1. 民の罪 (: 1～6)

モーセがシナイ山から「一向に下りて」来ないので、民は次第に不安になってきたのでしょうか。民は忍耐しきれずに、アロンのところに集まって、言いました。「さあ、われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。われわれをエジプトの地から導き上った、あのモーセという者がどうなったのか、分からないから」。

この民の求めから分かる彼らの問題点はどのようなことでしょうか。一つは、目に見える神々に安心を求めようとしていることです。これまで神様の力ある御業を何度も経験して来ましたが、直接神様のお姿は見えず、神様の臨在は表されています。また、マナが与えられることは続いており、それによって民は養われています。神様の御業はなされているのに、神様に信頼できず、目に見える神々を求めています。

民にはまだ、主のみことばに聞き従う信仰の歩みが確立していないのでしょうか。民は「主の言われたことはすべて行います」と言い、主との契約を受け入れました。けれども、不安になって、主の臨在や主のみことばよりも、目に見える安心を求めたのでしょうか。しかし、聖書によって神様は、目には見えないけれども、みことばによってお語りくださる神様ご自身に信頼するようにと繰り返し教えています。

もう一つの民の問題点は自分たちのことが中心になっていることです。彼らは「われわれ」と繰り返し言っています。自分たちに安心を与え、自分たちの求めに答えてくれて、自分たちの都合に合わせてくれる神々を造ることを求めています。これが偶像です。

また、「われわれに先立って行く神々を」と言っていますが、民は約束の地に行こうとしているのではなく、エジプトに戻ろうと考えているのです。それは使徒の働きの中に記されているステパノのことばから分かります。「ところが私たちの先祖たちは、彼（モーセ）に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく思って、アロンに言いました。『われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい』。神様から目を離して、自分たちのことばかり見て、不安になり、エジプトをなつかしくしてしまうのです。

私たちは彼らのことを責めることはできないでしょう。私たちも、目に見える安心材料を求め、自分の都合に合わせて神々を造る誘惑にさらされています。みことばに従うのも無視するのも解釈するのも自分の都合に合わせているなら、それは偶像です。偶像とは自分のために造るものです。自分が仕えているようであっても、実は自分に仕えさせているのです。私たちの思いや生活の中でそうなっていることがないでしょうか。

民の求めに対して、アロンは人々に、耳に付けている金の耳輪を外して、持って来るように言います。人々はそのようにし、アロンはその金を使って、鋳物の子牛を造ります。すると、人々は「イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神々だ」と言います。アロンはさらに金の子牛の前に祭壇を築き、「明日は主への祭りである」と呼びかけます。人々は翌朝早くから、ささげ物を献げ、「座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた」のです。

このようにイスラエルの民がしたことを見ると、主から与えられていた十戒に違反していることがいくつもあります。金の子牛を造り、「あなたの神々だ」と言ったことは、第一のことば「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない」と第二のことば「あなたは自分のために偶像を造ってはならない」に違反しています。アロンは「明日は主への祭りである」と言って、安息日と関係なく祭りを行いました。第四のことば「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ」に違反しています。また、民が「戯れた」ということばは、他の箇所でも性的な罪を表すことばとして使われています。第六のことば「姦淫してはならない」に違反しています。

このように、民が行ったことは十戒に違反していることでした。周囲の民族の偶像礼拝と似たようなことをしたのです。神、主は、イスラエルをエジプトから救い出し、イスラエルが神の民としてふさわしく生きて行くために、十戒をはじめとする律法を与えたのです。偶像礼拝をしている他の民族と違う生活をするように求めているのです。そうしてイスラエルの歩みを通して、主ご自身の栄光を表そうとしておられるのです。けれども、イスラエルの民は、他の民族の影響もあり、彼ら自身が主のことばに聞き従う訓練を受けておらず、他の民族と同じような状態となっています。むしろ、他の民族と違ったものになりたくなかったのでしょうか。

主は私たち教会の一人ひとりにも、主の民としてふさわしいあり方を求めておられます。私たちの歩みを通して、主ご自身の栄光を表そうとしておられます。そのために、みことばを与えてくださり、私たちがみことばに聞き従うようにと教えておられます。本来、みことばに聞き従うことは自由を与えられることです。パウロはガラテヤ書の中でこう言います。「キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは堅く立って、再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい」(5:1)。キリストによって救われた私たちは罪の奴隷から解放されて、本当の自由を与えられています。その幸いを味わっていき

いと思います。

みことばに聞き従うときに、異教徒との違いが明らかになります。社会の中で他の人々と同じように歩むことは多くの場面ではありますが、クリスチャンとしての歩みは、未信者と明らかに違うことがあります。それを隠さずに、明らかにすることで、主の民であることを証して行くのです。

2. 主の怒り（：7～10）

イスラエルの民の罪に対して主は怒られます。「墮落してしまった。彼らは早くも、わたしが彼らに命じた道から外れてしまった」とモーセに言います。そして、「わたしはこの民を見た。これは実に、うなじを固くする民だ」と言われます。「うなじを固くする」ということばは、手綱に逆らう牛や馬に使われるそうです。神様に背く民の強情な姿がありました。

そのような民に神様の怒りが燃え上がり、神様は民を「絶ち滅ぼす」と言われます。人の罪に対する聖なる正義の神様の裁きがあると伝えられます。

正義の神様は強情な民を絶ち滅ぼすということに、人は反論することはできません。神様が与えた律法は、ご自身の正義に合致する行動を求めています。律法に反する罪に対して神様が怒りを表すことは完全に正当なことです。神様はすべてを正しくさばかれるお方です。神様が正義のお方だからこそ、私たちは神様に信頼することができますし、「うなじを固く」しないで、聞き従うことを願うのです。

3. モーセのとりなし（：11～14）

主はイスラエルの民を絶ち滅ぼすと言われると共に、モーセに対しては「あなたを大いなる国民とする」と言われます。しかし、モーセは自分は助かり、「大いなる国民」となるから、それで良いとは考えません。モーセは民のためにとりなします。このときのモーセのとりなしは3段階の訴えによってなされます。

まず、11節。神様ご自身がイスラエルの民をエジプトから救い出されたのではないですか、どうして絶ち滅ぼすのですか、と神様の救いの御業に訴えます。

また、12節。エジプト人によって神様の御業が誤解され、汚されることがないように、神様の正しさを明らかにする必要があるのではないですかと訴えます。

そして、13節。この第三の訴えが最も重要です。神様はアブラハムを選び、契約を結び、子孫と相続地を約束されました。その神様の契約を思い起こしてくださいと、契約に基づいて、約束を守られる神様の真実に訴えます。あわれみ深い神様に赦しを求めて、とりなすのです。

約束を守ることも神様の正義の現れです。神様にご自身の正義によって罪に対する怒りとふさわしいさばきを主張されたことに応じて、モーセも神様の正義に訴え、ご自身の契約を守られるお方に信頼して、祈り求めているのです。

私たちもこのモーセの祈りを見倣う必要があります。神様が聖書の中で契約を結ぶと宣言され、あるいは様々な約束を与えておられます。それに基づいて祈るのです。契約を守られるお方、約束を実現されるお方に信頼して、祈るのです。

モーセのとりなしに対して、主は応えてくださいました。神様が思い直されたとはどういうことでしょうか。モーセの嘆願によって、主はご自身の意図を変えたのでしょうか。そうではなく、主はご自身の意図を一貫して行おうとしておられます。主はご自身の正義を表されるのです。罪に対する怒りも神様の正義の現れであり、契約を守られることも神様の正義の現れです。そして、民のためのモーセのとりなしも神様のみこころにかなうものでした。

私たちの周りにも、多くの偶像となるものがあり、私たちの内に聖められなければならない思いがあると思います。いろいろなことで私たちも不安に襲われることがあります。感染の拡大や病気、収入の減少、人間関係の問題など悩まされます。その時に私たちが本当に何を信頼しているのかが問われます。目に見えるものに頼り、不安を少しでも和らげてくれそうなものを得ようとするのか、それとも、目には見えないけれども私たちに御目を留めてくださる神様に信頼し、そのみことばの約束に堅く立つのかということなのです。あるいは、神様の命令に従うということは窮屈でつまらない生き方だと思う人もいます。自分の生きたいように生きると言います。そのように考えなくても、クリスチャンであっても、みことばによって示されている神様のみこころよりも、自分の気持ちや願望を優先させて、不十分な従い方になっていることがあります。

しかし、私たち教会の一人ひとは、みことばから神様のみこころを示され、祈ってみこころに従い、神様にゆだねることが必要です。主が私たちを助けてくださいます。そうして、私たち主の民の歩みを通して、主の恵みが証しされて行きます。

また、モーセは神様の正義に訴え、ご自身の契約を守られるお方に信頼して、民のためにとりなして祈りました。聖書の中に、神様が与えてくださる救いの契約が宣言されています。神様の様々な約束が与えられています。私たちもそれらに基づいて祈りましょう。契約を守られるお方、約束を実現されるお方に信頼して、祈りましょう。